



典礼委員会担当司祭 菅原友明

今月のポイント

「聖なる、聖なる、聖なる神」

「感謝の賛歌」も口語に変更

「万軍」は消滅

司祭が唱える叙唱の結びは「終わりにくほめ歌います」、「つつしんで讃えます」など会衆を「感謝の賛歌」へと招く言葉になっています。これに応じて会衆は「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、万軍の神なる主…」と唱えてきました。が、今回の改訂では、ここも口語文に改められ、「聖なる、聖なる、聖なる神、すべてを治める神なる主…」となります。現行の「万軍の」は戦いを連想させ不適

切だということ、かねてから変更が求められていたようです(※1)。「万軍の」と訳されてきた語は、ラテン語で「サバオート」、ヘブライ語の「軍隊、軍勢」を意味する言葉に由来しており、語感で考えると「万軍の神」は名訳でしたが、今後は「すべてを治める神」になります。これは「日本への適応」というよりも「時代への適応」と言えるでしょう。いずれにせよ表現されているのは「全能の神の力強さ」という点です。この賛歌の結びで唱える「ホザンナ」はヘブライ語の「どうか救ってください!」という言葉に由来しています。囚われの身となっている私達を救いに来てくれる強力な軍隊のように、神様には私達をお救いになる力があることを、この賛歌を歌って讃えるのです。

そもそも、どうしてこの賛歌は、「感謝の賛歌」と呼ばれているのでしょうか。まず、直前に司祭が叙唱で物語った神の救いの業への感謝を込めて捧げる歌だからであり、さらには、この賛歌が奉献文(「エウカリスティアの祈り」感謝の祈り)の附随物などではなくて、まさに「感謝の祈り」そのものの一節として全会衆で唱える歌だからです(※2)。そして究極的には、ミサ(感謝の祭儀)全体にとってのこの賛歌の重要性という視界も

開けてくるはず。こう考えると、この賛歌を歌うときの感謝の込め具合も深まっていくのではないだろうか。こうした意義を汲み取って、日本語では「感謝の賛歌」という表題をつけてきました。が、世界ではラテン語の出だしの一語をとった「サンクトゥス」(聖なる)と呼ばれることも多いため、今回の改訂で表題は「感謝の賛歌(サンクトゥス)」と表記されるようになります。

ところで、これまで「感謝の賛歌」を唱えるとき、先唱者が最初の「聖なるかな」を唱える慣習になっていました。今後はどうなるのでしょうか。「聖なる」だけだと短くて言いづらいので、「聖なる、聖なる、聖なる神」までになっていくのでしょうか。それに関しては特に定められていません。各教会で望ましい形を模索していくことになるでしょう。なお、「感謝の賛歌」を歌唱する場合は、これまで通り「聖なるかな…」と歌うことができます。

※1 カトリック中央協議会『新しい「ミサの式次第と第一」第四奉献文』の変更箇所 36頁参照

※2 『ローマ・ミサ典礼書の総則(暫定版)』7